



入学おめでとうございます

新入生の皆さん、秋田大学教育文化学部・教育学研究科への入学、おめでとうございます。本日にここに若さ溢れる新入生を新しい仲間として迎えることができましたこと、本当に嬉しく思っています。新型コロナウイルスの影響が3年間続いており、その間にコロナ禍の下での大学受験の乗り越え方についてノウハウが蓄積されてきたとはいえ、入学試験という厳しい試練を乗り越えて見事入学されましたこと、心より敬服いたします。

教育文化学部は、1873年に設立された秋田県伝習学校が原点となっています。今年は2023年ですので、教育文化学部は150周年を迎えることとなります。また大学院教育学研究科が創設されたのは1989年になりますので、今年で35周年を迎えることとなります。このような区切りの年度に皆さんを無事お迎えできたこと、学部長・研究課長として安堵しております。

私が秋田大学に赴任したのは1995年ですが、その頃の大学キャンパス内での時の流れは、今と比べると比較的ゆっくりとしたものでした。ところが秋田大学が独立行政法人化した2004年頃から、変化のスピードが加速し始めたように思います。私が年を取ったせいでしょうか、令和時代となってから特にあわただしくなったように感じており、時流についていくのが精一杯の状態となってきました。

その間、大学における教育も変化してきましたが、その原動力となったのがICT技術の進歩です。この進歩は当分の間続くものと思われそうですが、特に最近話題となっているのが、米国のAI研究企業OpenAIが昨年11月末に発表したChatGPTをはじめとする、チャットサービスです。たとえばChatGPTは自然言語処理の技術を使っており、そのためこれまで以上に違和感ない形でコンピュータとコミュニケーションが取れるように設計されています。このこと自体は素晴らしいことであり、このようなチャットサービスを利用すると商品説明文を自動で生成するなど、広範な利用が期待されます。しかし一方で、このことは大学教育にと

教育文化学部長・教育学研究科長 上田 晴彦
っては大変脅威ともなります。大学ではレポートが課されることも多くあるともいますが、チャットサービスを利用すると、簡単にレポートを作成することができるようになります。試しに、「秋田県」「千秋公園」というキーワードで、ChatGPTを利用して文章を作成してみると、次のようになります。

『秋田県の千秋公園は、秋田市にある公園で、市内有数の大規模な公園の一つです。秋田県の代表的な観光スポットの一つであり、地元の人々や観光客に親しまれています。(中略)千秋公園は、自然との触れ合いやレジャーを楽しめる場所として、秋田県の魅力を満喫できるスポットの一つです。』

途中を省略していますので分からないと思いますが、省略した部分には千秋公園には動物園があるという説明がなされています。このように2023年4月段階では、ChatGPTは正確な説明文を作り出すには発展途上のようなのですが、一方で人工知能の進歩を考えると正しい答えを出してくるのに、そう時間はかからないと思います。(なお1950～73年には、千秋公園内に児童動物園が設置されていたようです。そしてその後動物園は大森山に移動し、現在に至っています。)

時代はどんどん移り変わり、皆さんがこれまで受けてきた教育の一部は時代遅れのものとなると思います。我々教員側も教育改革を積極的に進めていくつもりですので、皆さんも自分の知識がガラパゴス化しないよう、努力を続けて下さい。教育文化学部・教育学研究科での皆さんの学生生活が、希望に満ち溢れたものとなることを願いながら、私からの祝辞いたします。



「研究」のあり方～多様な「知」を融合し社会に還元・発信する～

学術研究推進会議長 大橋 純一

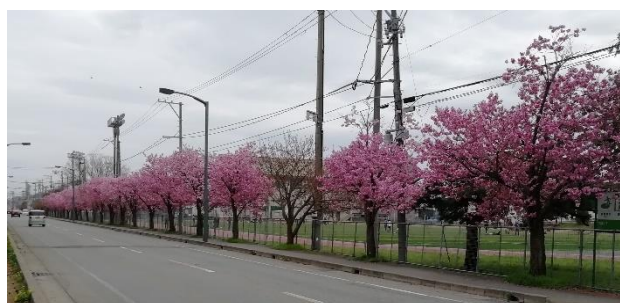
教員が教育・研究に携わっています。まさに時代が求める「総合知」および「学際的研究」の格好の実践現場がここにあるといえます。

このような環境の利を生かすべく、本学部・研究科では、課程や学科、専攻の枠組みを超えた教員同士がグループを組み、次代を睨んだ総合的・学際的な研究を積極的に進めています（学術研究推進会議では本年度、そうした共同研究の構想に対する研究費補助を予定しています）。また本号で紹介のある各種フォーラムをはじめ、地域との連携、さらには学生を巻き込んでの共同研究もさまざまに展開されています。研究はまず行うこと、そしてその成果を社会に還元することが必要ですが、同時にその活動が目に見えてわかること、より多くの方々に知ってもらうことが重要だと考えます。今後も本学部・研究科ならではの研究の実践を、「みなおと」ほか、多様なチャンネルを介して発信していきたいと思えます。

大学教員の「研究」などと聞くと、人それぞれに固有の専門があり、その道を追求する営みに感じられるかもしれません。もちろん学問的な独自性を深めることは重要ですし、かくゆう私も、聞かれれば「～学が専門」などと無意識に答えてしまうように思います。しかし一方で、その「研究」が人や社会にどう役立っているか（役立つとはいわないまでも何らかの接点を持っているか）、みずからの関心事を満たすだけのいわゆる“研究のための研究”になっていないか——。それらを研究活動の中で自問し、時に自戒しながら研究のあり方を見つめ直すことも、上記と同じくらいに重要です。

近年、教育・研究を考える視点のひとつに、「総合知（専門知の融合）」や「学際的研究」といった用語が持ち出されることが多くなりました。特に後者は、単独の学問分野では解決が難しい課題に対して、複数の分野が手を携え、調査や分析を学問横断的に進めて行く研究のことを指して言います。複雑な問題をはらむ現代社会では、「研究」はもはや特定個人の殻に閉じこもったそれではなく、他分野とも広く関わり合いながら、新しい領域を開拓していくことが求められる時代なのかもしれません。

その意味において、本学の教育文化学部には学校教育課程と地域文化学科が、大学院教育学研究科には教職実践専攻（教職大学院）と心理教育実践専攻があり、それぞれに多様な専門知を有する



地域連携セミナー・フォーラムについて

秋田大学教育文化学部では、2010年度から、秋田県内の自治体・教育委員会、民間企業、NPO法人等との連携・協力による地域教育への貢献および研究成果の地域社会への還元を目指し、卒業論文等のテーマを自治体等から公募する事業を開始し、今年度で13年目を迎えました。2018年度からはパイロットリサーチプロジェクト—学生による調査・実験テーマの公募—と銘打っています。略して「PRプロジェクト」です。地域の協力を得ながら学生が指導教員のもと卒業研究として取り組むものもあれば、テーマに関連する授業において、受講した学生が教員とともに研究に取り組むものもあり、いずれも、学生と教員とが協働して

多彩な研究を展開してきました。さらに、教員が自治体や企業からの要請に応じて取り組む研究も行っています。

この成果を学部全体で共有するとともに、学外の方とも共有するために、2022年度には、以下のようなセミナー、フォーラムを開催しました。

- 9/29：第1回地域連携セミナー
- 11/22：第2回地域連携セミナー
- 2/20：第3回地域連携セミナー
- 3/1：地域連携懇談会フォーラム

を開催しました。

そこでの教員による発表の一部を紹介いたします。

【地域連携研究報告】

オープンデータ等を活用した地域課題の解決について

地域社会コース担当 林 良雄

本テーマは秋田市デジタル化推進本部からのご提案により、大友未羽、佐藤聖真の2名の学生が取り組んだ研究です。この研究の目的は、秋田市で取り組むべきオープンデータの活用についての提言をまとめることです。

オープンデータとは国、地方公共団体及び事業者が保有する官民データのうち、誰でもが容易に利用できるように公開されているデータで今回はデータ提供だけではなく、これらのデータを一般市民等にわかりやすい形に加工して提示したのも対象としました。

まず、事前調査を参考に、秋田市民にとって需要があるサービスとその形式についてアンケート調査を行い、需要の多いサービスや、マップ形式で提供してほしい情報に関して知見を得ました。このアンケート調査の結果と秋田市のオープンデータの提供現状を踏まえて、次の二つの提案を行いました。

(1) 子育て支援について

アンケート調査で需要が高かった子育て支援情報の提供ですが、秋田市の公式LINEでは既に充実した情報提供を行っています。ただ、フォロワー数などが少ない状況です。一方で秋田市ではInstagramやTwitterも運営しており、こちらの方がフォロワー数が多いです。そこで、これらを連携し、LINE登録者の増加に取り組むことを提案しました。

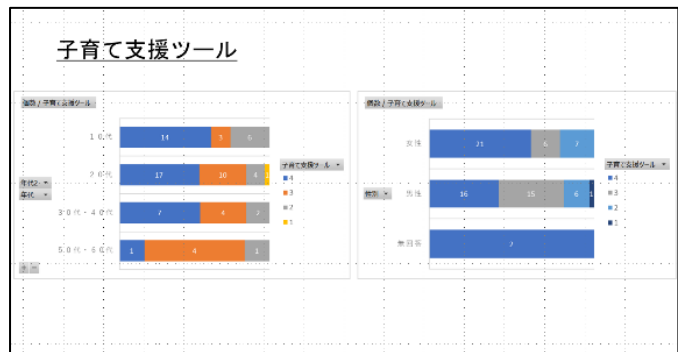
(2) 公共サービス等のマッピングについて

調査では最も需要があるサービスで、おむつを替えることができる場所などの要望が見られました。その中には秋田市でも提供されているものもありますが、これら正確性がもとめられ、また頻繁に更新が必要です。しかし、それは人手不足や予算面で困難と考えられます。そこで、限定された範囲について情報を提供していくこと、高校生などの学生等に協力してもらい進めていくことを提案しました。特に後者については住民参加型のイベントの開催などにより、住民サービス維持に参画してもらうことにより「地方自治体は行政だけでなく、住民も協働して作っていく」という意識付けにつなげることができると考えられます。

以上が概要ですが、この研究を通して、学生は行政についてサービスを受ける側ではなく、サービスを提供する側に立って考えることができたのではないかと感じました。

事例研究

- 観光分野
 - 静岡県「ふじのくに静岡ロケ地ガイド」
<https://opendata.pref.shizuoka.jp/dataset/fuji-161.html>
 - 名古屋市長「歩こう！文化のみち」
<https://arukou-bunkanomichi.com/>
- 子育て・福祉分野
 - 鯖江市「つつじこリトル+」(アプリ)
https://www.city.sabae.fukui.jp/about_city/it_nomachi/app/ritoru01.html
- 秋田市
 - あきたおさんぽマップ~Akita City Walking Map~
 - 秋田市除雪作業車両追跡MAP



【地域連携研究報告】

人文学を地域に活かす：台湾の日本認識と秋田観光

国際文化コース担当 羽田 朝子

これらについては、これから学生のみなさんと一緒に解決方法を模索していきたいと思っています。

台湾は親日の国として有名ですが、秋田とも関わりが深く、秋田を訪れる外国人のうち最も多いのは台湾からの観光客です（以下、コロナ禍前のデータに依拠します）。そのため台湾人の秋田観光は、地域振興にとって重要なテーマといえます。中華圏の文化を専門とする私のゼミでは、このテーマについて人文学的なアプローチで研究をしています。そのなかで最も重視するのは、台湾では日本あるいは秋田についてどのように認識し、どこに魅力を感じているのかを理解することです。この研究について現在までの成果を以下に紹介します。

台湾は1895年から1945年まで日本の統治を受けており、この期間台湾の人々は日本人として教育を受けました。戦後台湾は中国に返還され、当時中国の政権を握っていた国民党が台湾で独裁政治を始め、国民党とともに台湾に移住した大陸系の漢族を重用しました。そのため戦前から台湾に居住し日本統治を経験した民族との間で民族対立が深まることとなります。その後1980年代後半に民主化が進むと、多文化主義に基づく多民族共生社会が目指されました。そのなかで日本統治時代についても、台湾の重要な歴史や文化の一部と見なされるようになりました。

こうした歴史をもつ台湾では日本に強い関心を持つ者が多く、日本旅行にやってくる観光客の数も中国や韓国に次いで第三位を占めています。リピーターが多いことも特色で、訪日回数を重ねるにつれ地方へ足を伸ばす傾向にあります。とくに秋田県では、外国人観光客のなかでも台湾人が2014年以降第一位を占め、2019年には5万人以上にも上りました。

台湾人が好む観光スポットは角館の武家屋敷や内陸縦貫鉄道が多く、康楽館や乳頭温泉、秋田ならではの郷土料理や伝統工芸も人気です。これは日本の地方独特の伝統的なものに対し、自分たちと共有する歴史や文化として、強い関心を抱いているからです。そのほか南国の台湾人にとって秋田の雪景色も大きな魅力となっています。どこか懐かしい景観が雪化粧で全く異なる佇まいとなり、それが何とも幻想的に映るのです。

その一方で課題も明らかになっています。たとえば以上で紹介した秋田の魅力は実は東北の魅力とも重なっており、東北のなかで見ると秋田県は台湾人観光客が一番少なく、東北の他県との競合にどう対応するかが大きな課題となっています。

	台湾	韓国	中国	香港	合計
2008(H20)	13,540(32.3%)	14,820	2,100	1,810	41,990
2009(H21)	14,720(32.7%)	17,250	3,010	2,280	45,060
2010(H22)	12,390(19.5%)	31,320	5,280	3,430	63,570
2011(H23)	3,420(15.4%)	7,110	2,170	820	22,150
2012(H24)	6,370(26.6%)	4,440	3,610	760	23,930
2013(H25)	8,130(25.8%)	8,950	3,200	690	31,530
2014(H26)	9,760(28.9%)	6,830	3,710	990	33,810
2015(H27)	13,540(27.2%)	12,460	3,890	2,060	49,810
2016(H28)	24,550(39.4%)	8,190	4,980	3,280	62,360
2017(H29)	42,380(44.5%)	12,150	8,440	6,820	95,130
2018(H30)	49,960(44.5%)	9,570	11,800	6,920	112,160
2019(H31)	52,460(43.9%)	7,290	13,700	8,210	119,320

秋田県における国籍別外国人延べ観光客数推移（2008～2019）

（秋田県「平成23年・26年・29年・30年・令和元年（平成31年）秋田県観光統計」より2020年度ゼミ生作成）



台湾の旅行社 HP に掲載されている内陸縦貫鉄道の紹介（雄獅旅行社）



【地域連携研究報告】

産学官連携醸造酒「宵の星々」の連携効果

地域社会コース担当 益満 環

私のゼミナールでは、マーケティング（モノが売れる仕組み）を研究しており、その研究活動の一環として、大仙市内の5つの酒蔵（出羽鶴酒造株式会社、刈穂酒造株式会社、合名会社鈴木酒造店、金紋秋田酒造株式会社、有限会社奥田酒造店）と大仙市農林部と連携し、出羽鶴、刈穂、秀よし、金紋秋田、千代緑の5銘柄を統一ラベル「宵の星々（よいのほしぼし）」という名前で一昨年から売り出しています。

学生が酒米の種まきから田植え、稲刈り、醸造、瓶詰、販売、PRまで、すべての酒造りの工程に参加しており、国内外の事例をみてもここまで広く日本酒のマーケティング活動に携わっているゼミナールはありません。学生達のがんばりにより、昨年度は販売前に予約分がすべて売り切れた他、大手通販サイトの吟醸酒部門では販売数が第1位になるほどの大盛況ぶりでした。宵の星々が地域ブランドとして益々認知され、秋田大学、大仙市内5つの酒蔵、大仙市の名が国内外に広く知れ渡り、地域がさらに活性化するために今年度も学生達と一緒に頑張りたいと思います。

以下、連携先の5つの酒蔵の代表蔵である秋田清酒株式会社代表取締役伊藤洋平氏および大仙市農林部主幹高橋勉氏から学生達と連携したことの感想を述べて頂きました。

秋田清酒株式会社 代表取締役 伊藤 洋平氏

『大仙市産米で醸す日本酒ブランディング』における産学官連携に参画させていただきまして弊社にごぞいましたプラス効果について述べさせていただきます。

原料米栽培の作業工程において、本年も当社の社員が自社栽培という形で栽培を行いました。昨年と同様、学生と現地で一緒に活動できる機会をいただき、学生の方には酒造りがすでに酒米栽培からスタートしていることを理解いただけたのではないかと思います。酒米栽培に関して当社社員が一通り栽培や農作業方法の説明をしましたが、学生の関心の高さや熱意が栽培者にも伝わり、田植え、草刈り、刈り取りなど自分の田のように思い入れを持って作業してくれたことが素晴らしかったです。また、学生のみなさんが取り組んだ宵



の星々の SNS などによる情報発信により、当社および宵の星々の情報拡散がなされました。さらにそれを当社が活用させていただき形で情報拡散を行い、学生さんのプロモーションと連動した形で当社 SNS のフォロワー獲得にもつながりました。そして、『宵の星々』の醸造に学生のみなさんが関わることにより、第三者にあまり触れることのない醸造スタッフが外部からの視線を意識するようになり、蔵に活力が生まれました。

大仙市農林部農業振興課 主幹 高橋 勉氏

益満ゼミの学生の皆様、米づくりや日本酒造りに関わる現場と一緒に作業していただくことで、酒米農家や酒蔵など、関係者の事業に取組む意欲が、年々向上しております。また、市職員や地域おこし協力隊など、市役所側にとっても良い刺激となっており、パイロットリサーチプロジェクトの実施により、それぞれが熱意を持ち、大仙市産の日本酒に関するマーケティング手法の取組みが進められております。

本プロジェクトでは、大仙市産日本酒5社の統一ブランドでの販売会やSNS等、マルチメディアによる販促活動や情報発信に取り組むものでありますが、同時に市の魅力もPRされております。次年度以降も継続しプロジェクトに取り組むことで、大仙市産日本酒の更なるPR手法の取組みのほか、新たな事業展開にもチャレンジし、シティプロモーションや地域経済活性化に繋げられることを期待しております。

【地域連携研究報告】

秋田の食資源を活用した学生参加型の地域貢献

秋田には食資源が豊富ですが、食品製造品出荷額が全国44位と低位にとどまっています。農一次産品をそのまま出荷するのではなく、いかに加工食品として価値を高めて出荷するのが産業上の課題となっています。そこで、私の研究室では、地域食資源を素材として、より付加価値の高い加工食品や健康素材を開発することを目指して研究しています。また、これらの研究成果を授業にも取り入れ、学生参加型の活動も行っています。

地域から公募型テーマであるパイロットリサーチプロジェクトとして開始したのが、大仙市より提案のあった中仙ジャンボうさぎの食肉としての活用です。文化庁より「100年フード」に認定された伝統食材ですが、飼育農家が減少して食文化継承が困難な状況です。私たちは、うさぎ肉の栄養価改善と新たな利用法の開発に取り組んでいます。エゴマ油にはオメガ3脂肪酸の α -リノレン酸が豊富で、生活習慣病予防に有用です。この搾油残渣を飼料に活用することで、うさぎ肉の健康機能を高めることに成功しました。さらに、学生発案の新メニューの開発を行い、中仙料飲店組合の協力で試食会を開催しました。

その他に、長年取り組んでいるのが、秋田の伝統的食用油であるアケビ油の復活事業です。他の地域では廃棄されているアケビ種子から搾った油は、かつて江戸～明治期には最高美味なものとして、植物油の王様と呼ばれていました。私たちがアケビ油の成分を分析したところ、通常の食用油とは異なった新規油脂が主成分であることを見出し、太りにくい性質を持つことが判明しました。現代の消費者ニーズに適應した健康油としての開発を目指しています。課題である原材料不足を解消するため、アケビの栽培化にも取り組んでいます。種子以外の部分を利用するための食品開発にも学生が取り組み、アケビ皮料理やアケビ果実ジャムなどを開発しました。

このように、秋田にはこれまで見過ごされていた食資源が多く存在します。通常の商品には不向きな場合でも、健康志向の優れた生理機能が見いだされれば、健康食品素材として活用できる可能性があります。特に、これまで未利用であったり廃棄されていたものに着目することは、環境面においても、また低コスト化を志向した事業面からみても重要です。今後もこのような観点から地域の食資源を有効活用する研究を行うことで、学生参

地域社会コース担当 池本 敦
加型のリアルプロジェクトを推進していきたいと考えています。



アケビ皮入りハンバーグを作成する学生
(2022年 地域学基礎)



地元の料理店の方と共同でウサギ肉料理を開発
(2022年 特定地域研究ゼミ)

【研究紹介】

反教育学、オルタナティブ教育、美的教育

私は教育において反教育学、オルタナティブ教育、美的教育を研究しています。これらのテーマの中心にあるのが生きづらさの問題です。現代において生きづらさは一つの重要なキーワードのように思われます。若者のメンヘラ文化の形成は生きづらさの表現の一つと捉えられるでしょう。生きづらいこの世界でいかに生きづらくなく生きていくか、この問題設定が私の研究の出発点です。ここでは生きづらさの問題が冒頭で挙げた研究とどう結びつくのか説明したいと思います。

まず、私は生きづらさの原因を実存思想やアナーキズムといった思想を手掛かりに考えます。実存思想家のサルトルは「実存は本質に先立つ」と言いましたが、この文の意味を私なりに解釈することで研究紹介をしたいと思います。

「実存は本質に先立つ」とはどういう意味でしょうか。まず、「本質」はここではレッテルと考えるといいかもしれません。例えば、お金持ち、偏差値や学歴、リア充、インスタのフォロワーの数もレッテルです。今あげたような幸せのレッテルを手に入れることで、幸せになれると我々は考えています。さらには、我々はこのようなレッテルによって自分の価値を判定し、また、判定されます。しかし、サルトルはそのような「本質」には規定されない「実存」が、各人の生にはあると言います。

「実存」はあるがままの生、自分らしい生ということが出来るかもしれません。「実存は本質に先立つ」とは、実存はあらゆる本質より優れていること、さらには本質を手に入れても必ずしも「幸せ」といった理想は実現できないことを示しています。ゆえに、実存思想は実存という自分らしい生を生きることを目指すわけです。

しかし、一部のアナーキストたちは、「実存は本質に先立つ」のにも関わらず、この世界では実存に生きることが困難であると主張します。私たちの世界では本質を獲得することが必要とされます。本質を追い求めるように駆り立てるのが現代社会の一つの特徴と言っているかもしれません。そして、その本質を追い求めることは学校教育でも徹底されます。学校では実存を生きることは重視されず、いい成績をとることや、良い子でいることなどの本質が優先されます。学校教育によって自分らしい生を生きることができなくなっている子がいるかもしれない、この視点から学校教育の問題性を明らかにするのが反教育学です。

こども発達コース担当 成田 龍一郎

では、自分らしい生を生きるにはどうすればいいでしょうか。私はこの問題の手掛かりとして広い意味での芸術に注目しています。本質によって限りなく押し縮められた自分らしさを、芸術によって表現し、解放することができれば、自分らしく生きることに繋がると思うからです。その観点から、オルタナティブ教育や美的教育について関心を持っています。



2023年度日本学術振興会科学研究費の新規採択状況

本年度は15件が採択されました。

期間	研究種目	氏名	職名	研究題名	直接経費合計 (千円)
R5-R8	基盤研究(C)	パシュカ ロマン	准教授	A cognitive triangulation of environmental ethics through Japanese and Latin American philosophies	3,600
R5-R7	基盤研究(C)	長谷川 章	教授	後期ソ連から現代ロシアまでにおける児童向け映像芸術の倫理的価値観の事例研究	1,200
R5-R7	基盤研究(C)	棟久 敬	講師	信教の自由の制約の実質的正当化審査—ドイツにおける実践的整合・憲法内在的制約	2,400
R5-R7	基盤研究(C)	瀬尾 知子	准教授	栄養学的・心理学的両側面からアプローチした幼児期の食育カリキュラムの開発	3,100
R5-R7	基盤研究(C)	長瀬 達也	教授	戦前の図画教育における小学校教員の美術的表現力習得に関する研究	1,500
R5-R8	基盤研究(C)	吉澤 恭子	教授	パリ市の小学校音楽専科教員のメチエ(仕事・専門性・職能)に関する総合的研究	3,500
R5-R8	基盤研究(C)	鈴木 徹	准教授	場面緘黙児の認知・思考プロセスの特性が社会生活に及ぼす影響に関する研究	2,200
R5-R8	基盤研究(C)	原田 潤一	准教授	非線形熱方程式に現れる様々なデルタ関数型特異点の解析	1,800
R5-R7	基盤研究(C)	林 正彦	教授	グラフェンのハイブリッド空間変調によるポスト半導体デバイス機構の探求	3,600
R5-R7	基盤研究(C)	石井 宏一	准教授	非線形力学系の活用によるペンジュラム・パターンの「造形的秩序」の解明	2,500
R5-R7	若手研究	清水 翔太郎	講師	近世大名居城奥向に関する基礎的研究	1,100
R5-R7	若手研究	Wan Jianguan (WanYunyun)	講師	The welfare effect of immigration policy for Japan: A quantitative analysis	3,600
R5	奨励研究	山下 清次	技術専門職員	3D立体模型を用いた火山防災教育プログラムの開発	320
R5	奨励研究	今井 彩	教諭	生徒の自律的・自発的な行動を引き出すためのリフレクションガイドの開発	330
R5	研究成果公開促進費(学術図書)	清水 翔太郎	講師	近世大名家の婚姻と妻妾制	800

秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要第 45 号

2023 年 3 月、秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要第 45 号が発行されました。ぜひご覧下さい。[秋田大学学術情報リポジトリ \(nii.ac.jp\)](http://nii.ac.jp)

■原著

地域における継承的アーカイブを活用した「次世代の平和教育」の構築—横須賀市を事例として—
……………外池 智
小学校国語科「書くこと」の資質・能力を育てる教科等横断的な学習に関する研究(1)

……………成田雅樹
美術科教員養成教育におけるデザイン教育の試み—「グラフィックデザイン演習 II」での教育実践—
……………石井宏一

文学体験論を基にした文学教材を読むことの授業実践と学習者研究—学習者の「理由づけ」に着目した分析と考察—
……………高橋茉由
生物分野の実験教材のコツ—教員免許状更新講習「生物分野の実験教材を体得する」に代えて—
……………石井照久

数学的モデル化過程を重視した数学授業の考察：高等学校数学科「三角関数」を事例として

……………中村 東・加藤慎一
協働型の校内研修と連動したキャリアアップシート開発—教職キャリア指標を用いた教員の資質能力の改善方策—
……………菅原 渉・佐藤修司
管理職着任前に必要となる資質能力についての考察—管理職の資質能力に係る質問紙調査からの分析—
……………鎌田 信・田仲誠祐・和田 渉
採用拡大期における初任層教員の自己認識の変容に関する—考察

仲誠祐・鎌田信・細川和仁・和田渉・鈴木貴子
エピソード記述を通した子ども理解の視点の変化—教育実習事後指導における実践から—

……………瀬尾知子・鈴木 翔・保坂和貴・山名裕子
発達障害のある児童生徒の自己有用感を育む方策の検討—特別支援学校での授業実践を通して—
……………工藤智史・武田 篤

生徒が自らの学びを振り返り、次の学習や生活に生かすための授業づくりの検討—知的障害特別支援学校高等部の職業科、家庭科の授業実践を通して—
……………池田和馬・藤井慶博・諸岡美佳
特別支援学校（知的障害）における生徒のキャリア形成に寄与する教育実践

……………今井 彩・前原和明

特別支援学校（肢体不自由）の自立活動を主とする教育課程における算数（数学）の教科指導に関する研究—年間指導計画作成上の課題と改善策の検討及び提案を目指して—

……………菊池高之・谷村佳則・藤井慶博
「情報 I」の教科書におけるプログラミングに関する用語の扱いについて……………林 良雄

■萌芽研究

フランスの小学生のための音楽教育と芸術史教育を繋ぐ授業実践—「オペラ」を題材としたオンライン学習教材 Cours de Lumni から—

……………吉澤恭子
就労アセスメントの活用促進のための多機関連携の充実に向けた研修のあり方……………前原和明



秋田大学教育文化学部研究紀要第 78 集

2023 年 3 月、秋田大学教育文化学部紀要第 78 集が発行されました。ぜひご覧下さい。

【人文科学・社会科学】

[秋田大学学術情報リポジトリ \(nii.ac.jp\)](http://nii.ac.jp)

秋田県内における教育環境格差と地域交通コスト格差・・・荒井壮一・鈴木拓馬

新型コロナウイルス感染症パンデミックによる地域コミュニティへの影響－秋田市における地域サロン活動を事例に－・・・石沢真貴

「音の風景」と「サウンドスケープ」・・・和泉 浩
地域経営の視点からみた教育の機能に関する研究・・・臼木智昭・伊藤慎一

方言使用とその意識に関する世代的な動態－秋田方言の 3 世代調査－・・・大橋純一

秋田市の混合ごみ有料化政策が生活系ごみ排出量に与える影響－合成コントロール法を用いて－・・・熊丸博隆

Tourist Attractions in North Tohoku Region of Japan: A Network Analysis

・・・TAKAHASHI, Kantaro

寓意としての『ローマの休日』－「ブラックリスト」時代のダルトン・トランボー・・・中尾信一

How to Build and Update Fuzzy Phrase Structure for a Head-final Language Incrementally:

The Syntax of [V], [N] & [V or N]

・・・HOSHI, Hiroto

高大官連携による地域活性化ワークショップ開催の効果・・・益満 環

ヨーロッパ人権裁判所判例における信教の自由・・・棟久 敬

【教育科学】

[秋田大学学術情報リポジトリ \(nii.ac.jp\)](http://nii.ac.jp)

美術科教員養成におけるデザイン教育に関する考察(3)－主として「情報表現」と「構成」の「共通性」の観点から－・・・石井宏一

教員養成系学部の学生の児童館等や少年自然の家等での学び～学部の独自科目；教育実地研究科目 I-IV～・・・石井照久

小・中学校における学校統廃合と少子化に対応した小中一貫教育～秋田県における学校統廃合の現状と小中一貫教育校の学校経営～

・・・和田 渉・鎌田 信

学校現場における効果的なメンタリング手法の開発－lonl Meeting 型対話の有効性の検証－

・・・小林正明・佐藤修司・栗林 守・臼木智昭

東日本大震災後における復興教育実践に関する考察－宮城における徳水博志の教育実践を中心に

－・・・佐藤修司

柔道大内刈りににおける極めの技術の安全への効果：軸足の位置

・・・佐藤永希・三戸範之・石井直人

保幼小接続期における子どもの家庭生活－就学前後の子どもの生活時間の変化に着目して－

・・・瀬尾知子

戦争体験「語り」の継承とアーカイブ(10)－広島市「被爆体験伝承者」・長崎市「家族証言者」を事例として－

・・・外池 智

市区町村における就労アセスメントの実施状況に関する全国調査・・・前原和明

知的障害者の余暇に関する文献レビュー：実践研究に焦点を当てて・・・山田有輝也・前原和明

大学院授業の体育の模擬授業に対する省察内容－「実施－省察・修正－再実施－省察」過程から

－・・・松本奈緒

秋田県仙北市無形民俗文化財「生保内田植踊り」に関する研究－起源と伝承概要、唄をめぐる

－・・・吉澤恭子

【自然科学】

[秋田大学学術情報リポジトリ \(nii.ac.jp\)](http://nii.ac.jp)

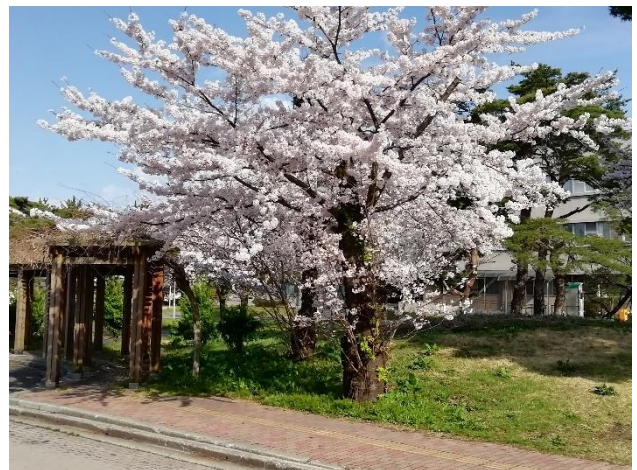
短期熟成法によるしょつつの製造と脂肪酸組成の変化・・・池本 敦・鈴木悠生

数式処理システム Maxima を用いた一般相対性理論の学習教材の開発・・・上田晴彦

コロナ禍における地方国立大学の陸上競技部に所属する全国入賞レベルの競技者へのコーチングに関する事例研究～男子走幅跳における 7.65m

の東北学生記録保持者のトレーニング事例～

・・・松下翔一



第4回心理実践フォーラムを開催

心理教育実践専攻1年 藤原 鈴



『第4回秋田大学心理実践フォーラム』では、子どもの学校・日常生活をどのように支えることができるかについて、学校現場・教育委員会の立場からの話と心理の立場からの話を聞くことができました。両方の立場の話を聞いたことで、教職と心理職がどのように連携できるかについて考える機会となりました。

教育次長の鈴木先生から適応指導教室『すくうる・みらい』で大切にしていることが紹介されましたが、中でも「失敗しても大丈夫という安心・安全な環境づくり」が大切であるという話が個人的にとっても印象的でした。不登校の生徒への「どのような学校なら休まず通えたか？」という調査で「体調の変化を分かってくれる」「発達障害について分かってくれる」「授業が分かりやすい」などが挙げられていることから、生徒が上手くいっていないときに学校側がどれだけ受け止めてくれるか？ということが1つ重要なテーマのように感じました。これは程度の差はあれ学校に通い続けている子どもたちも同様に考えているのではないかと想像しました。

また心理の立場から木村先生が、学校や児相、警察などが連携する際には各組織に特有の文化をお互いに尊重し合うことが大切だと話されていましたが、これははじめや不登校対応において保護者と教師がどれだけお互いの考えや辛さを理解し尊重できるかということにも同じように言えると感じました。相手の主義主張の背景には何か理由があるのかもしれないと想像したり確かめたりすることは個人間のやりとりでも大切なことだ

と感じるので、心理職を志す私としては一層心に留めておきたいことだと思いました。

先生方がたくさんのデータや資料を基に話をしてくださったのでどれも興味深く聞かせていただきましたし、何より先生方の熱量が感じられたことでどんどん話に引き込まれていきました。子どもたちを支援するためにたくさんの立場の人が関わるからこそ、どうすればお互いの知見が上手く合わさって生かされるのかをこれからも私なりに考えてみたいと思いました



令和4年度
第4回 秋田大学心理実践フォーラム

**子どもたちがすこやかに
生きるために私たちができること**

主催：秋田大学教職高度化センター臨床心理相談室・秋田大学教育学研究科
心理教育実践専攻
後援：秋田県教育委員会、秋田市教育委員会

学校現場における子どもたちをとりまく課題は、年々多様化複雑化しています。教育の現場では「昔と比べて子どもの様子が変わってしまった」「子どもたちの気持ちや理解できない」といった嘆きにも似た声が増えるようになってきました。こうした現状に対し、我々は何ができるのでしょうか？本フォーラムでは、秋田市教育委員会教育次長鈴木太氏から、豊富な教育経験をもちにこれまでの取り組みについてご講演いただき、これを受け本学部地域社会・心理実践講座の心理学を専門とする教員が研究・実践を紹介し、「現代」を生きる子どもたちが抱える課題と、私たちがいかに対応していくかを考えていきます。

基調講演

**「一人一人を大切に
教育を推進するために」**

講師 **鈴木 太 氏**
(秋田市教育委員会教育次長)

シンポジウム

木村 久仁子
(秋田大学教育文化学部 准教授)
専門領域：福祉心理臨床

Hou Yuejiang
(秋田大学教育文化学部 講師)
専門領域：発達心理学

指定論者 **鈴木 太** (秋田市教育委員会教育次長)
司 会 **北島 正人** (秋田大学教育文化学部 教授)

2023年
3月18日
土曜日
13時00分
-16時30分

会場
秋田大学
地方創生センター
2号館
大セミナー室
(裏面地図参照)

受付
12:30~13:00
開会挨拶
13:00~13:05
基調講演
13:05~14:15
シンポジウム
14:30~16:30

参加申し込み
は、下記 アドレス
に空メールをお送
りください。
akitapsycourse
@gmail.com
(お問い合わせも
このアドレスまで)

先着 60名
3月13日締切

参加資格：幼稚園・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校教員、生徒指導・教育相談担当者、養護教諭等の学校関係者。公認心理師・臨床心理士等の心理臨床の専門家、教職志望や心理学を専攻する学生など。

2023年度主な役職者等の紹介

◎執行部

学部長・研究科長 上田晴彦
 副学部長（教育・教員養成・財務・施設担当） 宇野 力
 副学部長（研究・地域連携・評価・広報担当） 大橋純一
 教職高度化センター長 鎌田 信
 附属学校経営委員長 星 宏人
 学部長補佐（特命担当） 林 正彦
 学部長補佐（教員養成・附属担当） 細川和仁
 学部長補佐（学生・FD・地域連携担当） 和泉 浩
 学部長補佐（広報・国際交流担当） 辻野稔哉
 学部長補佐（キャリア担当） 羽田朝子
 学部長補佐（教職大学院担当） 佐藤修司
 事務長 川辺朋矢

◎課程・学科・専攻・コース等

学校教育課程主任 林 正彦
 教育実践コース主任 堀江さおり
 英語教育コース主任 畠山 研
 理数教育コース主任 田口瑞穂
 特別支援教育コース主任 鈴木 徹
 こども発達コース主任 瀬尾智子
 地域文化学科主任 中野良樹
 地域社会コース主任 益満 環
 心理実践コース主任 綾部直子
 国際文化コース主任 小倉拓也
 教職実践専攻長 田仲誠祐
 学校マネジメントコース長 佐藤修司
 カリキュラム・授業開発コース長 長瀬達也
 カリキュラム・授業開発副コース長 外池 智
 発達教育・特別支援教育コース長 藤井慶博
 心理教育実践専攻長・コース長 北島正人

◎各種委員会等

学部運営会議長 上田晴彦
 教育企画会議長 宇野 力
 学術研究推進会議長 大橋純一
 入学試験委員長 篠原秀一
 教務学生委員長 石井照久
 学務委員長 成田雅樹
 キャリア委員長 林 良雄
 教員養成委員長 宇野 力
 教職入門実施委員長 保坂和貴
 教育実地研究実施委員長 吉澤恭子
 教育実習実施委員長 佐々木雅子
 介護等体験実施委員長 前原和明
 教職実践科目実施委員長 石原慎司

保育士養成実施委員長 瀬尾知子
 地域連携委員長 大橋純一
 地域文化コアカリキュラム委員長 石沢真貴
 国際交流委員長 辻野稔哉
 留学生委員長 HORTON WILLIAM BRADLEY
 広報委員長 大橋純一
 点検・評価委員長 大橋純一
 学生協議会議長 和泉 浩
 学生支援基金運営委員長 和泉 浩
 財務委員長 宇野 力
 安全管理委員長 宇野 力
 情報システム管理委員長 佐々木重雄
 情報化推進会議長 林 正彦
 人事委員長 上田晴彦
 人権倫理委員長 上田晴彦
 教員評価委員長 上田晴彦

◎附属関係

附属幼稚園長 山名裕子
 附属小学校長 佐藤修司
 附属中学校長 星 宏人
 附属特別支援学校長 前原和明
 附属学校地域協働協議会議長 上田晴彦
 附属学校運営会議長 上田晴彦
 附属学校経営委員長 星 宏人
 附属学校学部共同委員長 前原和明
 附属学校勤務改善委員長 佐藤修司
 附属学校研究・研修委員長 山名裕子
 附属学校情報化推進委員長 佐藤修司
 附属学校インクルーシブ教育推進連絡会議長 前原和明

◎大学本部（本学部関係）

教職課程・キャリア支援センター副センター長 上田晴彦
 センター長補佐 鎌田 信
 学長補佐（地域協働担当） 臼木智昭
 地方創生センター副センター長 臼木智昭
 学長補佐（男女共同参画担当） 山名裕子
 ハラスメント相談員 谷村佳則
 学生相談所専門相談員 長谷川章
 学生相談所相談員 小野寺倫子
 柴田 健
 石井照久
 佐々木千佳
 中尾信一
 瀬尾知子
 木村久仁子

2023年度事務部・技術部等（本学部・研究科関係）の体制

【5月1日現在】

事務長	川辺朋矢	〃	仁野綾子
総務担当		事務職員	佐々木なな
総括主査	大坂直毅	〃	藤井雄太
主査	豊嶋彩子	事務系スタッフ	今野景子
事務職員	佐々木拓馬	〃	佐々木優
〃	佐藤大輝		
事務系スタッフ	太田 葵	入試課（教育文化担当）	
〃	佐々木紹子	総括主査	麻生厚司
〃	辻内こずえ	事務系スタッフ	佐藤麻衣子
〃	佐藤奈津子		
〃	高山美千世	学生支援・就職課	
〃	茂木蓉子	事務職員	小山田隼人
〃	朝倉由美子	事務系スタッフ（就職情報室）	三鍋治世
〃（臨床心理相談室）	成田明子	〃	鈴木種彦
会計担当			
総括主査	菊地 恵	技術部	
主 任	高橋大樹	総括技術長	成田堅悦
事務系スタッフ	長尾徳子	技 術 長	毛利春治
		〃	小林 到
附属学校園		技術専門職員	若杉 圭
事務室長	榎 清幸	〃	山下清次
		〃	綿谷健佑
総合学務課（教育文化担当）			
主 査	丸山貴生		
主 任	成川 緑		

学部・研究科の活動（2023年3月～4月）

【全学】

3/12：後期日程
3/23：卒業式
4/5：入学式

【学部】

3/1：地域連携懇談会フォーラム
3/16：後期FD・SDフォーラム
3/18：第4回秋田大学心理実践フォーラム
3/23：旭水会、卒業を祝う会
4/4：在学生ガイダンス
4/6：新入生ガイダンス
4/7：授業開始

【教育学研究科】

3/7：教職大学院入学予定者説明会
3/9：省察実習専門部会

3/23：秋田県教委、教職大学院入学予定現職教員説明会

3月中：教職大学院部会書面審議
4/3：教職実践専攻現職教員院生ガイダンス
4/4：在学生ガイダンス
4/6：新入生ガイダンス
4/7：授業開始

【附属学校園】

3/9：附中卒業式
3/15：附小卒業式
3/27：離任式
4/6：新任式・始業式
4/7：附中入学式
4/10：附幼入園式、附小・附特入学式

新任の先生からのメッセージ

<こども発達コース>

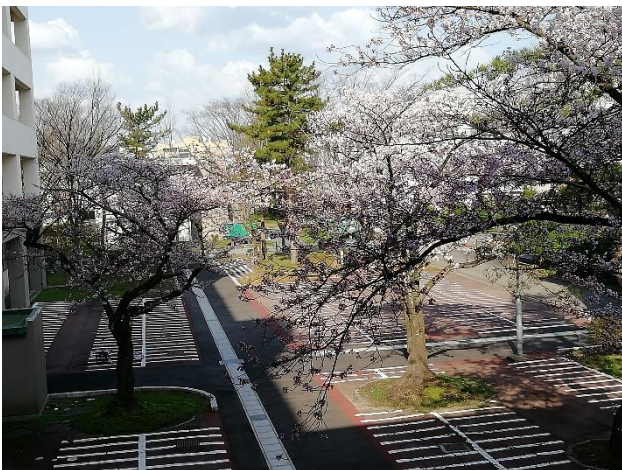
成田龍一郎（なりたりゅういちろう）助教
はじめまして、この度三月に着任しました成田龍一郎と申します。自己紹介の際にみなさん自分の専門領域をおっしゃるかと思いますが、いつも私は自分の専門分野はなんだろうかと困惑します。私の専門領域は強いて言うなら教育哲学、社会思想史ということになるかと思いますが。専門領域が曖昧な私でも研究を続けられたくらいには、哲学・思想研究は自由だとも言えます。

「勉強」が嫌いだった私が研究者になるくらいには「研究」を続けてこられたのはその自由さのおかげであったかもしれません。読書が好きだから文学や言語の問題を研究したり、バンドをやっていたから音楽や美学について研究したり、その時やりたいと思ったことを自由に研究してきました。

そんな私は教育も研究してきたわけですが、なぜ教育を研究してきたのか、実は教育が好きだからではなく嫌いだからです。私は高校を中退しています。私は中高一貫の学校に通っておりました。高一の時、入学以来仲の良かった他クラスにいた友人がいじめを受けて精神に異常をきたしてしまいました。「成田」と呼び捨てで話してきた友人

が、入院から戻ってきた時、怯えながら「成田君」と呼んできた光景は今でも忘れられません。そのいじめに教師も加担していたと聞いた時はさらにショックでした。元々学校は嫌いでしたが、その出来事をきっかけに学校に行く意味が完全にわからなくなり退学しました。

そこから教育学部に入学して、秋田大学に来るまで、学校の問題性や学校教育とは別の形の教育について考えてきました。秋田大学に来てからは（あえてはっきり言いますが）問題だらけの学校教育の中で、教員たちは何ができるのか、考えています。一人たりとも学校によって苦しむ子どもを出さないように、そして一人でも多く子どもを笑顔にできるように、教員は何ができていけるのか、教員になるみなさんと一緒に考えていけたらいいと思います。



発行 **秋田大学教育文化学部／教育学研究科**

〒010-8502 秋田県秋田市手形学園町1-1 TEL 018-889-2509 FAX 018-833-3049

教育文化学部・教育学研究科HP <http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/>

学部研究科通信「みなおと」バックナンバー⇒http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/guide/gu_magazin.html

教職大学院通信「暁鐘の音（かねのね）」⇒http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/graduate/graduate_magazin.html

* 誌名「みなおと」の由来である秋田県女子師範学校校歌（1910年制作）を聴くことができます。

http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/guide/gu_symbol.html をご覧下さい。